別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　　第　　号

氏　　名　横山　真理

論　文　題　目

「構成活動」を原理とした音楽科授業におけるイメージの発生過程の解明

論文審査担当者

主　査　名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　柴田好章

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　大谷　尚

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　渡邉雅子

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究の対象は､｢構成活動｣を原理とした音楽科授業デザインに基づく授業である。「構成活動」とは、典型的には、楽器づくり、うたづくり、音楽づくり、図形楽譜づくりなど、学習者が音楽表現を構成的に行う音楽構成活動を総称する用語である。音楽教育の分野においては、日本学校音楽教育実践学会を中心とする研究コミュニティ（本論文では「音楽教育実践学グループ」と表記）によって､「構成活動」の原理にもとづく音楽授業の研究が進められてきた。その特徴は、１）音が出る素材に学習者が自発的に働きかけ思考錯誤しながらイメージを表現する過程を重視する点、２）学習者の音楽表現の過程に働く音や音楽に対する思考（音楽的思考）を重視する点、３）音楽表現の結果だけでなく音楽表現と音楽的思考を関連付けて評価することを重視する点にある。そして、イメージの役割については、音楽表現に付随する音楽的思考との関連、内的な衝動性や感情との関連、共感的コミュニケーションとの関連において論じられてきた。しかし､「イメージ」は「音楽教育実践学グループ」内で授業構成論や実践論を構築する上で通用する構成概念であるが、そのコミュニティの外側の者にとって理解しづらく、イメージに対する了解可能性は低いという課題があった。

そこで本研究では､「構成活動」を原理とした音楽科授業において、学習者の心の中にイメージがない状態からイメージが芽生え顕在化し共有される過程、すなわちイメージの発生と共有の過程を解明することを目的とし、以下の課題を設定している。

1. 学習者の心の中にイメージがない状態から､いつ､どのような音や音楽に対するイメージが芽生えるのか。
2. 音や音楽に対して芽生えたイメージは、どのような媒体(イメージを表現するための手段）によって顕在化し、それによりイメージはどのような影響を受けるのか。
3. 音や音楽に対するイメージは教師や学習者の間でどのように共有されるのか。

研究対象としたのは、著者が授業デザインを開発し実践した中学校特別支援学級での音楽科授業であり、授業者や学習者の発言の逐語記録に、音や音楽を表現する行為の記述（音の採譜を含む）を加えたデータを分析している。

その結果、先行研究と比較し、以下のような知見が見られた。課題１については、先行研究では、学習者が音の出る素材に衝動的に働きかける行為が「構成活動」の出発点になるとされ、衝動的に音を出す自発的な活動を重視した授業構成理論が構築され､イメージが衝動を制御すると示唆されてきた。しかし､「構成活動」の出発点において、イメージがいつ、どのように発生するのか明らかにされてこなかった。本研究によって、衝動的に音を出す行為によって生まれる音との相互作用の中で音響に対する興味や快の感情が生まれ、思考の働きによって音響に対するイメージが発生することを明らかにした。課題２については先行研究では、比喩的な言葉を手がかりにイメージの役割の重要性が論じられてきた。しかし、学習者の多様な表現行為(比喩的な言

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

葉以外の言葉、身振り手振り、演奏など)にもイメージが介在していることを捉えきれていないという問題があった。本研究によって、多様な表現の媒体（比喩的な言葉、感情を表す言葉、気付きを表す言葉、手振り、身体動作、口ずさみ、図形など)によりイメージが表現されていることを明らかにした。課題３については、先行研究では、イメージが共感的コミュニケーションを促進していることが示唆されてきた。しかし、心の中の見えないイメージがどのように共有されるのかについて明らかにされてこなかった。本研究によって、音や音楽、口ずさみなどの演奏、身振り手振りなどの身体動作、様々な言葉といった多様な媒体が組み合わさってイメージが表現されることにより、イメージの媒体を通した共有可能性が生まれることを明らかにした。

以上の通り、本研究は、これまで「音楽教育実践学グループ」内では自明視されてきたイメージの重要性について、その発生過程に遡り明らかにしようとした研究であり、以下のような価値がある。

（１）音楽におけるイメージという、把握が非常に困難な研究テーマに挑んでいる。筆者自身による実践と分析を通して、直接に観察が困難な内的なイメージを明らかにしようとしている。イメージの発生や共有の過程を、授業諸要因の関連構造として図式化して提案している。

（２）授業分析によって、先行研究では明確ではなかったイメージの発生過程について明らかにしている。イメージの発生過程にはイメージの萌芽を充備する段階、イメージの萌芽が起こる段階、イメージの顕在化の段階、イメージの共有の段階の４つの段階があると捉えられること、イメージの発生過程には、衝動、興味、快の感情、思考、気付きなど観察困難なレベルの要因が影響を及ぼし合っていることを明らかにしている。

（３）これまで「音楽教育実践学グループ」の授業研究者は、イメージという用語を自明視したままイメージの役割の重要性を論じてきた。イメージは直接には観察不可能である。そのためイメージという概念の共有可能性や了解可能性は閉じた研究コミュニティの中にとどまっていた。本研究では、授業実践の事実において何をイメージとするかを確認しながら、イメージの発生過程に関する知見を図式化したことによって、閉じたコミュニティの中でしか通用しなかった構成概念としてのイメージの共有可能性や了解可能性を高めている。

（４）「構成活動」を原理とした音楽科授業における「イメージ」を研究するための研究方法について工夫がみられる。イメージは直接には観察不可能であり、記録からイメージの発生過程やそれに関与する要因を同定するためには、分析者による解釈を伴う。本研究ではアブダクションの定式化によって推論の蓋然性を高めている。また、単一の事象を単一の概念と対応づけて解釈するのではなく、複数の事象を同時に対応

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

する複数の概念に対応付けて解釈をすることによって、解釈の全体の妥当性を高めるために、授業諸要因の関連構造の考え方を適用した。さらに、反証可能性を担保できるようにするために、イメージを音の物理量や音・音楽の特徴に還元し、事象からイメージを同定する手順を明示化した。これにより、解釈のプロセスの透明性を図った。このように、本研究において観察困難な研究対象であるイメージを研究する際の研究方法を明示したことは、「構成活動」を原理とした音楽科授業における「イメージ」の研究方法の提案にもつながったといえる。

（５）「音楽教育実践学グループ」で提案されている実践には、身近な道具が楽器に変容する活動や、「図形楽譜づくり」など、実践そのものの中に、音から音楽への進化やイメージの外在化といった、研究面から見ても有効な手立てが内在しており、実践と研究の双方の充実を図ることができる。

また、以下のような問題点や課題も存在している。

（１）非常に難解な概念を正面から扱っており、何をもってイメージの発生とするかの根拠や基準を明示することは難しい。難しい課題に挑戦するためには、大胆かつ適切な言葉を使いながら、概念を精錬させていく必要がある。

（２）授業の中でのイメージの発生を問題にしているが、授業を離れた音楽一般の考察との関連性は十分に明確にされていない。今回の事例から明らかになった関連構造図で示されるイメージの発生や共有のモデルは、授業を超えた価値を持つのかどうかについても考察が深まると良い。

（３）（２）と関連して、特に「一回性」という概念は、授業にも音楽にも共通している。こうした点から、一般化や理論化が難しい音楽や授業を対象とすることについて考察が深められる可能性がある。

（４）音のイメージを把握する手順をできるだけ客観的に明示するために、音や音楽の特徴との関連を考察しているが、さらに音楽一般について論じられている理論が授業を分析する際に参考にできるのではないか、検討すると良い。

（５）改稿により改善はしているが、何をイメージとするのかは分析者の解釈によるところが多いため、イメージの定義や判断基準をさらに精緻化する必要がある。

（６）今回の事例は、中学校の特別支援学級という、少人数であり、また子どもの興味が行動に現れやすいという特別な環境にあった。幼児、小学生、中学生、高校生、大人など、発達段階による違いについてはどのように考えられるか、今後の課題である。何らかの適用性はあると考えられる。

これらの課題を残しているものの，今後の研究の発展に期すべきものであり，解決される可能性は十分に高いものと判断される。審査委員全員一致して，本論文を博士（教育学）の学位に値する研究成果であると判断し，「可」と判定した。